

第 10 章

- 震災後こころのケア活動従事者座談会 -

震災後こころのケア活動 従事者座談会

本座談会は、当センターで平成 25 年 2 月 7 日に行われた座談会を収録したものであり、平成 25 年 3 月に作成された「仙台市精神保健福祉総合センターにおける震災後こころのケア活動のまとめ」に掲載されたものの再掲で、一部改変している。

<出席者>

林 みづ穂(センター所長・精神科医)
原田修一郎(同主幹・精神科医)
佐々木妙子(同主幹兼デイケア係長・保健師)
福本 恵(同相談係長・保健師)
森谷 郁子(同主査・看護師)
佐藤 大介(同主査・心理士)
門田亜希子(同主査・心理士)
佐藤 明子(同主任・心理士)
小林 敦子(保健師)
一條 梢(保健師)

【福本】 震災後の心のケア活動のまとめということで、精神保健福祉総合センター(はあとぼーと仙台)以下、「センター」としての活動はどうだったかという考察をしようと思います。どうぞ遠慮なく、ざっくばらんな形でお話を頂ければと思います。震災の直後からの動きについて時系列で振り返り、率直な実感を語り合って後々の参考になるようなものを残していければと思います。またできればガイドライン(仙台市災害時地域精神保健福祉ガイドライン)の改定を見越して、その参考になるような話も皆さんから出して頂ければと思っています。ということで、ガイドラインの記載に沿って、発生時期別にお話し頂きたいと思います。実際に起きたこと、その立場で感じたこと、今だから言える大変だったこと、こうだったら良かったと思うことなどは課題として、それに対してどうしたら良かったかということは解決策として挙げられると、まとめる時に役立つかと思います。

事前に皆さんに頂いたご意見の中に、話すのはなかなかしんどい気持ちもあり、思い出す作業が、ちょっと自信がないなという方もいました。そういう方もいて、でも仕事だから出席しているということです。当然のことながら発言を強制しない、今日の発言について批判・否定しない、異なる意見も肯定的な言葉を用いて表現するなど、ご協力のほどよろしくお願ひします。

では、早速入ります。まず「緊急対応期」は震災発生直後から 3 月 13 日までということで想定してありますが、この時の状況はどうだったのでしょうか。運営マニュアルでは、センター在所者の安全の確保、センター利用者のうち災害時要支援者に関する安否確認および支援、センター利用者へ当センター機能の一時停止を連絡及び安否確認などがあります。これについてはどうでしょう？デイケアはやっていたんですね。

【森谷】 活動中に地震が発生しました。一つの部屋に集まって、机を合わせて、四角のスペースの中で机の周りに皆で座っていました。結構揺れましたよね？なので、とにかくまず皆で机の中に入って、なかなか揺れが収まらなかったのも、しばらくその状態でいました。地震の揺れが治まるまで待っていたのですが、メンバーさん達は落ち着いて行動されていました。メンバーは十人前後くらいいて、スタッフは私と片寄さんでした。メンバーさんの中で特に騒いだりパニックになったりするような人は全くなかったです。むしろ「大丈夫だから落ち着いて」など他のメンバーさんに声をかけてくれる人もいました。また、原田先生が 2 階(デイケアの会場)に上がってきて「大丈夫か」と声をかけてくれたことも心強かったです。それでまず避難してということで専用駐車場(避難場所)に行きました。

【佐々木】 いつもの避難訓練の時のように、全員避難したんです。職員も中にいる全員がとにかくその専用駐車場に避難しました。寒い日で、途中で雪も降ってきて。

【原田】全然覚えてないんですけど、診療予約の患者さんが来ていて診療中だったんです。後から看護師さんに聞くと、それこそ「先生デイケアに駆けつけていました」って言うんですよね。それを僕全然覚えてないんです。今話を聞いて、ああそうなんだって。

【森谷】先生が「大丈夫？」って来てくれたんですよ。

【原田】だから、話を聞いて僕“行ったんだ”と思って。そこで、僕何してたんだろう。

【森谷】そういう気になるんですね。

【原田】そういうような感じ。気付いたら皆が向こう(所外)に行くって感じ。専用駐車場(避難場所)に皆が行く。

【森谷】最初は防寒着を持たないまま出て来たので、ちょっと揺れが治まってから職員が中に入り、防寒着を持ってまた戻ると寒さ対策をして。でもしばらくは外にいましたね。

【佐々木】いましたよね。そのうち雪が降ってきたんですよね。

【森谷】そうですね。それで、インテーク面接で来ていた方がちょっとパニックになってしまって。

【佐々木】そうそう。

【森谷】それで毛布を渡してっていうことはありましたけど。デイケアのメンバーさんは本当に落ち着いていましたね。

【原田】ひきこもり家族教室もやっていましたよね。(参加者が)取り乱していたんですよね。

【林】その後、安全確認しながら帰らせるっていう動きをしていますよね。

【森谷】基本ここに留まらないで帰すという方針をとっていたんですよね。

【林】そうですね、デイケアは月曜からできるかどうかわからないことをお伝えして、その後バスとかタクシーを停めに出る、見に行くとか何とか手段を作りました。

【森谷】それであとは車で来ていた方々が乗り合わせて送ってくれたりしました。

【佐々木】陶芸で、窯を使っていたんですよね。

【森谷】はい、作品はほぼ大丈夫だったんですけど。ガスを使用していたので、その点検の作業がありました。プレイルームは食器棚の上の物なんかは落ちたくらいで、食器は崩れたけれど割れることもなく。

【佐々木】そうでしたね。

【森谷】被害は事務室が一番ひどかったんですけど、薬局はどうでしたか？

【原田】薬局もそう崩れてなかったですね。後で自分や他の家を見たけど、ここ(センター)ってあんまり(物が)崩れてなかったんですよね。

【小林】審査会とか自立支援医療の書類を入っている倉庫がしばらくしたら全部倒れていたのが一番崩れたものでしたね。

【原田】そうですね。

【林】ただ、電気がつかないし、あとはプロパンだからガスは大丈夫だけれど、電気がだめだから水道もだめっていう状態でしたよね。日曜日(3月13日)の夕方くらいに復活したんですってっけ。

【原田】日曜日の夕方です。

【福本】夜はどうやって灯りを取ったんですか？

【林】懐中電灯数個と、原田先生が持っていたライト、それと、一條さんが持ってきてくれたキャンドルで。

【一條】でも、当日はキャンドルはなかったです。

【福本】懐中電灯だけだったんですかね？ 一個だけ？ たまたま先生が持っていたということですか？ それで十分ではないですよね。

【一條】一度家に帰ってからまた戻って来て、防寒着とか食事を持って来ました。

【小林】ここの設備としてはなかったんですってっけ？ 自家発電とか。

【森谷】防災用品などの準備はその時はなかったですね。その前に色々話はしていたんですけどね。

【原田】なかったですね。実は自分たちの所(市内)で起こるんじゃなくて、外(市外)で起こった時に自分たちが行く(派遣)っていう想定で色んなものを揃えようとしていて、予算も取っていたんですよ。それで、僕と岡崎係長(当時、精神保健福祉総合センター相談係長)で道具屋さんとか見に行ったりしていたんですよ。そういう準備段階にあったんですが、そのようななかで起こってしまって。セ

ンターの中で泊り込むっていうことは想定していませんでした。

【林】でもここはデイケアのヨガマットがあったり、ベッドがあったり、プレイルームに座布団があったり、毛布があったり、そういう意味では色んな予備力があつたと言えるかもしれない。それがアメニティの上では良かったと思います。

【福本】インテークの方一人ですか、その時センターにいたのは？診察の方はどうでした？

【原田】診察の方と、ひきこもりの家族教室(参加者)と、デイケア(メンバー)でした。

【一條】退院促進支援事業の件で隣の援護寮に行っていました。その時は状況がわからず、援護寮に少しいたんですけど。その場では実感が湧かずっていうことはありました。

【林】メンバーも職員も割と皆この近くにいて良かったですね。

【森谷】それを考えると、デイケアの施設外の活動時に起こったらどのように動くかっていう具体的な決まり事はないので、それは考えておかないといけませんね。

【福本】連絡体制ですね。

【森谷】連絡体制と、どう動くか。

【福本】対処法とかですかね。

【森谷】そこまでの想定はなかったですね。電話が通じることを前提に、電話連絡するっていうことしかなかった。電話も通じなくなったらどうしようとか、戻れなくなった時にどうしようっていうことは、考えなければならぬと思います。

【原田】よくデイケアのメンバーさんたちと冗談で言い合うんですけど、ちょうど一週間前が野外活動だったので、一週間前に起こっていたらどうしたんだろうって。野外活動で山形に行っていたので。

【佐々木、福本、森谷】そうですね。

【福本】帰って来られなくなってしまうかもしれませんね。次に、「被災に関する情報収集等」ですが、「被災地域の現状把握」「被災地域の精神科医療確保の状況」、「精神障害者社会復帰施設等の社会資源の被害状況」、「避難所、救護所の設置および精神障害者の避難の状況」、「精神科医療救護班設置の必要性の検討」(各区と相談)とあります。これらについて思い当たることをお願いします。

【原田】他の部署とは全く連絡がとれませんでした。

【林】市役所本庁(以下、本庁)からの連絡を待っていたんですよ、とりあえず初めは。でも何の連絡も取れない状態だったので、情報は待っていては全然来ませんでしたね。メールも通じないし、だから結局自転車で行ったんです。そうしたら、どこの階も誰もいなくて、入れなくなって瓦礫みたいになっていて。(健康福祉局のある)8階まで登って行ったら8階は人がいました。障害者支援課、総務課、保健医療課、健康増進課などを巡って、様子や被害の現状を把握していきました。それから、岡崎係長が若林の情報を持っておられました。

【福本】所長がまず本庁に行って岡崎係長も行ったんですか？

【一條】岡崎係長はバイクで一度行って、職員一名が情報収集のため本庁に当日行って。

【原田】岡崎係長は若林だけでしたよ。当日ではないですけど、翌日か翌々日に。

【林】当日行ったのは・・・？

【小林】当日行ったのは、所長と岡崎係長だったと思います。

【原田】本庁に？

【小林】はい。でも、本庁も何もできない状態だから[とりあえず待っていて]って言われて帰ってきました。だけど、それから全く連絡がなかったから所長が行ったんだと思います。

【福本】行ったのは夕方ですか？

【林】翌日でした。

【福本】私は当時本庁にいたんですけど、(3月11日は)16時くらいまでずっと全員外に出されていたんですよ。だから何もしてなかったと思うんです、すぐに来られても。入れなかったと思う。それから片付けするように言われたので片付けたりしていました。まだ市役所も機能してなかったと思います。でも、まずは本庁に行った方が良くてことですよ。

【林】絶対行かないと。

【福本】特にバイクの人が良いかと。

【佐々木】ここはちょっと、(市役所本庁への)アクセスの面では不自由ですからね。

【林】本庁に行ったから、厚労省に保健師さんをお願いしたっていう情報が健康増進課から得られたんですよ。だからそれと同じような形で外部派遣チームをお願いするという動きが取れたんですよ。あとは、薬の手配と食料調達。私たちが食べる分がないから。本庁の方にはグループフルーツや焼きそば、パンなどがあったから、一部ビスケットとかもらってきた気がするんですけど。そういう、「食料ちょうだい」っていうのも発信しないともらえなかったし、あとガソリンのこともそうですね。緊急車両にしてもらわないと優先的な給油をしてもらえなかったから、そのお願いをしたりとか。あとケアチーム用にピンクリボンキャンペーンのユニフォームを借りるとかもしましたね。

【原田】薬の手配は、12日に所長から携帯メールで頂いています。どの薬をどのくらいか手書きでいいから書いてくれということでした。これは、どのくらい必要かということはまだ被害状況も分からないし、行ってみないとどれだけ薬が必要かって分からない。とりあえず、多く出してあげばいいだろうってことで書いて出しました。それが12日で、そして13日に薬の間屋から薬が届いたんですけども僕が頼んだ量の十分の一くらいでした。ただ、実際に使ったのはその十分の一だったんですね。実際、仙台市の場合は医療機関のほとんどが14日から機能し始めていましたからその程度で済んだんです。交通手段さえあれば医療機関へ行けたっていう状況だったので、実際は薬の量としてはそう必要としなかった。ただ、そこは医療機関が動いたかどうかということが非常に大きかったのかなと。そうなってくると、薬のこともあるんだけど、我々がやってきたことの中で「すごく役に立った」って言われているのは「医療機関の再開情報」をその都度調べてその都度発信していたってことなんですよ。これは色々な所から非常にありがたがられたことでした。医療機関の情報を集約してその都度更新して発信していたってことが大切だったのかなって思います。

【佐々木】確か13日の午後から電話が開通したので、皆で電話かけを分担して市内の病院と連絡取り合ったんですね。

【林】診療を再開しているかどうか、どのくらいの日数分処方できるか、あとは新患受付できるかどうかですね。かなり具体的なところを一日2回3回くらい更新していましたね。それを保健所の方にも情報提供したんです。

【原田】活動の中で、それを伝えるってことが大きかったですよね。避難所に支援に入って「お薬ください」って言われて薬は2、3日分処方するんですけど、「あなたかかりつけは？」って言うと「A病院です」。「A病院は、やっているよ(診療再開)」「じゃあ、行けばいいんだね」っていう話ができることによって2、3日分処方すればいいわけだし、「お薬手帳」を持ち歩いているわけじゃないから、実際の処方内容も分からないので、このくらいの量かなって考えながら出していました。薬とか処方も大切だけれど、情報を伝えるということも薬を処方することと同じくらい大切なんだなって思います。

【小林】避難所を回っていても絶対聞かれました。精神科だけじゃなく、内科とかの情報を見てメモをして、それを伝えるだけでも安心してくれたと思います。

【福本】「社会復帰施設等の社会資源の被害状況」って書いてありますけど、これもやったんですか？

【原田】隣の援護寮が福祉避難所だったんですよ。避難所で対応できない障害者の方たちが何人か搬送されてきました。保健所の方が保健所の車使って連れて来たりとかして、僕は夜中にその方々に処方したり診察したりとかもしていました。実はそういう役割が隣の援護寮にあったんだとその時知りました。福祉避難所だったんだと。そこで保健所の職員に「そっちどうなっているの？」ってきいたら、「避難所はすごいことになっている」みたいなことを言われた記憶がありますね。

【一條】一番連絡がどこからもつながらなかったのがグループホーム、ケアホームだったようです。誰も連絡せず誰にも連絡できずっていう状況だったみたいで、とあるグループホームの方が直接センターへ情報収集に来たこともありました。

【林】複雑でしたよね。

【福本】すごい数あるじゃないですか、グループホームって。

【一條】なので、今はそのためにグループホーム・ケアホーム連絡会立ち上げに向けた運営会議において、災害対応のマニュアルを作ろうかっていう話はあるんですけど、まだ実現はしてないで

すね。

【福本】連絡網みたいなのができ、困っている所がそこでわかれば、そこに物資を届けるなどですか？本庁ではなくてここがやるんですね？本庁でもやる？

【一條】一応、事務局は本庁の障害者支援課になっています。

【福本】グループホームやケアホームへの電話かけみたいなのは役割分担があったんですか？

【一條】特に役割は決まっていませんでした。

【福本】思い出したらでいいんですが、「避難所、救護所の設置状況および精神障害者等の避難状況」っていうのはどうでしょうか。

【林】色々情報支援する中で、健康増進課にお願いして適宜情報はもらっていたんです。どこに何ヶ所で何人入っているかっていう。災害対策本部の情報ってこっちに回ってこなかったですね。なので、ある時から、障害者支援課長に「情報を流して下さい」と伝えて得られるようになりました。やっぱり最初は情報を取りに行ったりこっちで発信したりしないともらえない。話は戻りますが、準備段階として、(災害時地域精神保健福祉)ガイドラインを作っておいたじゃないですか。その中で、はあとぼ一とが心のケアについては窓口となるよう定められていて、あとは、そのことが本庁の方でも少なくとも健康福祉局内では知らされてあったんですよ。だから心のケアと言えはあとぼ一と、みたいな感じで十分実現化されたということは良かったこと。もう一つは、これは他から評価が高いんですけど、健康福祉部長が「はあとぼ一とに任せるよ」と言ってくれたんです。「他所に対して謝る所は謝るし感謝することは感謝するから、はあとぼ一とでやってくれ」と仰っていて。だから、他所だといちいちお役所的に上にお伺いを立てないと動けないみたいなのがネックになるみたいなんですけど、仙台市は急性期の動きをはあとぼ一とで決めて動けたといったことが他所からは評価が高いんです。もう一つは、外部応援職員用マニュアル。これをホームページに出していたということもすごく評価が高い。それに基づいて他所から来てくれた皆さんは自分たちのことは自分でと想定しておいで下さっていました。

【福本】「精神科医療救護班設置の必要性の検討」ってどういうことでしょうか？

【原田】こころのケアチームのことではないですか。その経緯は分からないですが、薬の必要量を出して欲しいと言われた時は決まっていたことだと思うんですけど。そこはどのような経緯で決まっていたのでしょうか？僕のところに薬をまとめてくれて言われた時点ではまとまっていた話なんですよ？

【林】そうではないんです。ただ、ガイドラインを作る時に、薬品卸のところと協定があるということ、マニュアルを作っていた時に知っていたんですよ。保健医療課経由で「そのお薬が必要になると思うから頂戴」って頼んで、バイタルネットが倉庫から取り出してくれたのがその薬ってことになるんです。だから医療救護班をどうするっていう話は全然なくて、それどころじゃなかったんです。

【原田】こころのケアチームを当センターから出そうっていうことになって出たわけですけども、その辺が決まっていく経過っていうのはどうだったんですか？

【林】センターの中で決めたんですよ。こころのケアは必要になってくるという想定があって、所長室でみんなで話し合いをして決めました。

【一條】岡崎係長が若林区の様子を見に行き、その後ですか？

【原田】その後です。行くと決まったところで、薬を2チーム分に分けたんです。そのうちの一つを持って13日の夜出たので、その時はもう決まっていたんだと思うんです。

【林】どこから要請があったからというよりは、自分たちで決めました。やらなきゃってことで決めて職員の分担表を作ったんです。

【原田】確か13日の夜に、僕と岡崎係長で出たんです。情報収集を含めて若林区役所、若林区R地区(以下、「R地区」)、宮城野区役所を回りました。なぜR地区を回ったかという、R地区に入っていた区の保健師さんが、大きい紙にマジックで処方が必要な人と処方薬を書いたものをファックスかコピーか何かで岡崎係長に渡したそうです。そして、大声で何とかしなさいと言われたということがあって、R地区に行くことになりました。R地区では全く灯りも何もなくて、人がものすごいっぱいいる状態でした。そこで保健師さんから4人の患者さんへの処方を求められました。結局見つかったのは2人だけでした。そのあと宮城野区役所に行きました。宮城野区役所では障害高齢課

の係長と精神保健福祉相談員さんがいて話をしましたが、区役所でも沿岸部の情報が十分に分かっていない状況でした。後から考えると、最初に R 地区に入っていましたけど、比較の問題で言うと R 地区は沿岸部に家が少なくてこともあって、他の沿岸部に住宅の多い地区に比べれば被害が大きくなかったようです。ただ、情報が入って来たから R 地区に行ったわけなんです。要するに、被害の程度よりも情報がある所に行ってしまうんですね。それだけ支援は情報の流れに左右されるということです。全く情報が入ってこないような被害の大きい所に支援が遅れるということが実際にはある。たぶん石巻なんかがそうだったと思うのですが、仙台の中でもそういう状況があったというのが、一番初めに感じたことですね。

【林】それで、情報がそろそろまで待って動き始めるか、そうではなく行ける所に行くかっていうことが当時の大きな問題でした。仙台市は動きが速かったと言われるのは、そうやって原田先生が最初に動いて、動きながら情報を収集して区とも共有して次の動きを決めるという、走りながら考えるというような形でやっていたからだったのじゃないかな。それで何とかなるくらいの物理的な距離感覚みたいなものもあったかと思います。

【原田】僕は最初、ケアチームっていうものをケアすることよりも情報を収集しに行く役割の方がむしろ大きいかなって思っていました。ケアするって考えていくと取りあえず待ちですね。ニーズがあったところへ行くみたいな感じ。でも実際はアウトリーチで動く支援ということになっていくと、情報とかニーズを探すことがまず一番先にあるんじゃないかなと思う。それをすごく感じながら動いていましたね。まず見に行く、情報を取りに行くということが大事じゃないかなって思っていました。

【林】それは本当に大事でしたね。ところで、マニュアルだと「情報・応援調整チーム」ってあるじゃないですか。そのチームを作れると良かったなと思います。このマニュアルは、当センターが外に出るという想定ではできていないんです。外に出たことがいけなかったということでは全然ないのですが、情報のやり取りやコーディネートをする部分が薄くなって、それがなかなか大変ではありました。厚労省や他県チームとのやり取り、情報を集めることと発信すること、色々なレベルや方法でやっていくことが必要でした。地元の精神科の先生方や色々な方が、仙台市を気遣って下さいました。ある先生は、「どこも窓口がどこかわからないけど、仙台市の場合はあとぼーとに行けば何かわかるだろう」ということでおいで下さいました。そういう風に認識して頂いたり、日頃からの関係があったりしたことは、非常に有難いと思います。

【一條】私も、所長がおっしゃる細かい分担の需要は感じました。

【小林】情報集約と言っても何をどうすればいいのかが漠然としていました。初めてのことでしたし、情報がないからとりあえず外に行って、行って収集してくる人と中でそれを集約してっていう感じでした。被害が大きすぎたので、最初は混乱して皆が出て行って中にいる人も何していいかわからないという状況はあったかと思います。少し日にちがたってから、何をしていくかっていうのがようやく少しずつ整理されてきました。

【林】一応、3月13日時点で分担表は作ったことは作ったんですね。あとは相談者やダイケアメンバーの安否確認とかもね。

【佐々木】ガイドラインがあることはわかってたけど、で、それで何するんだっけ？みたいな感じではなかったです。もう大きな被害だったから、まずどうなっている？っていうことからでした。良くも悪くも、ガイドラインを見て云々っていう動き方はしなかったですね。

【森谷】ダイケア係でも、佐々木主幹も私も他のスタッフもこのころのケアチームで外に出してしまったので、ダイケアメンバーの安否確認、情報収集については残っているスタッフに「これとこれはお願い」ってやってもらったり、電話かけしてもらったり、色んなところで指示出ししながらやりました。

【佐々木】ガイドラインでいう所の「情報・応援調整チーム」の部分を、全て所長がやっていたという状況でした。所長が一定期間その役割をずっと担っていたということでした。それを今後どういう風に考えていったらいいのでしょうか。

【福本】私は今ガイドラインに沿って聞いていたんですか、全部所長がやっていたんだなって改めて思いました。

【林】私はガイドラインを見ていて、当時から「応援調整チーム」がないとか、関係機関の会議が出来ないとか、考えてはいました。

- 【佐々木】 外部派遣チームというのはセンターのガイドラインにはまるっきりないですよ。ガイドラインは当センターの職員が出るというイメージでは書かれていないので。
- 【林】 そこからして出発点が違ったわけですよ。でも実際には、先ほど原田先生が言ったように、情報収集しながら動くことがはセンターの職員のすごく大事な役割でした。他県のチームが来た時にナビゲーションを含めて一緒に動くというのもガイドラインの中にはないんですが、それをやることで得られるものはすごくあるなあと思ったので、当時間もあえてガイドラインに書いてないとは言わなかったんです。一方で、センターに残ってそのコーディネートをやるっていう役割の方が手薄になった面はあったから、今後もしも同じことがあったら、やっぱり「情報・応援調整」はもう少し厚くしないとしんどいと思います。
- 【福本】 「4名～6名」って書いてありますね。
- 【林】 それをほぼ一人でやっていたので、すごく大変ではありました。深夜2時頃までかかってやったこともありました。色々な条件に合わせてスケジュールなども変える必要がありましたから。一方で、3月の末から職員のローテーション表の中に「休み」っていうのも入れました。これは高く評価されています。
- 【小林】 実際チームで出ている時は、区役所に行けばそこはタイムリーに情報をもらったので、この「調整」っていうのがイメージと違ったようなんですけど、どうだったんでしょう？
- 【福本】 はあとぼーとが全部情報を集めるということでしょうか？
- 【小林】 地域の情報は刻々と変わるので、そこで教えてもらうのが一番良かったと思いました。もっと違う何か「調整」が必要だと思ったり…。チラシとかは全部中にいる人に作ってもらいましたので。
- 【福本】 最初の3日目までの間に、もうこの啓発活動の準備に入っていますよね。
- 【森谷】 チラシなどは作り始めました。
- 【小林】 こういうのがあった方が良かったとか、避難所の運営者向けのあった方が良かったとかっていうのを考えて、帰ってきたら作ってという感じでした。「調整」とはちょっと違うかもしれないですね。
- 【林】 そうですね。避難所に貼り出すポスターとかもありましたね。
- 【佐々木】 全部準備して14日には回りました。
- 【小林】 回ってみて、こういうのがあった方が良かったとかで、検討しました。
- 【林】 そしてまた作りましたよね。職員のメンタルヘルスについてのご相談を受けて職員向けのチラシを作ったり、上司の方の相談に乗ったりすることもありました。
- 【福本】 ほどなく3日目が終わって、4日目からに移っていいですか？4日目は3月14日からで、4月までを「応急対応期」としています。いかがでしょうか？
- 【森谷】 他都市からの応援チームに関しては、一時集中して来られて、こちらが対応しきれなくて当日にチームを一つ増やして応援チームに入ってもらおうようにしたという時もありました。
- 【林】 3月の下旬、4日間ほどそうでしたよね。一番ラッシュの時期でした。何をお願いしたらいいかわからない中で、日中会えない人のために夜もやってみたらということもあって、昼夜に分けてその数日間支援に入ってもらいました。その時期は太白区にも入りました。その後、厚労省に「短い数日間のチームではない形で」とお願いできるようになったのですが、それ以前は「行きますから」と連絡が来たらそれを受け入れるという形だったので、こちらの準備が整わなかったことと、先方も数日単位でおいでになっても勝手がわかりづらかったことというのがあったと思います。徐々に避難所の人数が少なくなってきたのもこの時期でした。避難所への避難者のピークは確か3月12日で、10万数千人というレベルだったんですけど。
- 【福本】 「外部応援チームの調整」は主にどなたがされたんですか？
- 【林】 私でした。
- 【福本】 一人情報応援調整チームですか？
- 【林】 そうでしたね。
- 【福本】 「市民からの相談に対する随時対応」と書いてあるんですけど、相談は入り始めていたんですか？
- 【佐々木】 通常業務に戻していこうとしていました。3月11日でストップしていましたが、その間デイケアの通所者はここに来てもいいとオープンにしていたので、日によって差はありましたが多い日に

は3~4人来ていましたね。正式には4月7日から再開しました。

【林】 デイケアが4月7日で、相談が4月11日から再開しました。はあとラインは3月11日が金曜日で土日挟んで3月14日から再開しました。電話があまり通じないから来なかったですけど、来たものは受けていました。来所はその頃はまだ受けられませんでした。

【福本】 「状況調査」としては、「各被災地域に関する情報収集および分析」とありますが、これらはさっきの話にあったように、実際どこかに向かうことで情報収集して、あとは中で管理し、皆さんで共有していったということでしょうか。

【林】 皆が同じ時に見られるとは限らないので、事務室にホワイトボードを置いて、それに得られた情報を書き込んだり掲示したりしていきました。外に向かう場合は行く時と終わりにミーティングをしました。所内でミーティングして、区に行ってミーティングして活動して、区に戻ってまたミーティングして、帰って来てまた所内でミーティング、という流れで、皆すごく疲れていましたね。

【佐々木】 疲れていました。

【林】 情報共有と、思いを吐き出せる場を意図してはいたのですが。

【佐々木】 最初のうちはやっぱりそういう場面が多かったですよね。皆大変だった、疲れたね、今日ががんばったねっていう感じで一日が終わったんですけど、だんだん皆時間がバラバラだから、早く終わって帰って来ている人たちが遅い人たちを待って、そして今度みんな揃ってやっとミーティングとなると、待っているのがだんだん辛くなってきていました。

【福本】 何時くらいまでかかったんですか？

【佐々木】 遅いチームは、帰ってきて6時半か7時でした。早いチームは5時半とか6時頃に帰っているの、全員が帰って来てから全体ミーティングというのが辛くなっていきました。次第に、待たないで早く終わったチームから先に所長に報告をして、早く来たところからやりましょうということになりました。主には若林区と宮城野区と分けて報告をすとか、ミーティングも簡潔になっていきました。所内ミーティングの記録は4月21日位に切れていますが、その後も結構やっていて、私の記録は6月まであります。

【林】 ガイドラインには書いてないんですけど、報道の問題もありました。報道関係の取材申し込みがたくさんあったんです。新聞やワイドショー的のものから啓発的な内容まですごくたくさんあったんですけど、本庁では基本的に「報道は受けなさい」というスタンスだったので、初めは受けていました。ただ、それが広がって、色々な所から申し込みが来るようになりました。中には「避難所でかわいそうな人達の話をお聴いているところ」を撮りたいというような、動く絵が欲しいとか、スケジュールも必ずしもこちらに合わせてくれるわけではないとか、かなり当センターにも被災者にも負担になるということで、途中から受けるのは止めて、「東北ライフライン情報」のような啓発的なものだけお受けするようになりました。報道が入った負担は大きかったです。また、情報に関して言うと、仙台市は県を通さないと情報が入ってきませんでした。けれど、それを知らずに待っていたら、4月から兵庫県チームや徳島県チームが継続されるのかどうかということも全然情報が入ってこなくなっていました。県にも言ったのですが、厚労省と直接やり取りさせてもらって、情報の受け取りができるようになり、逆に「数日単位のチームをまた入れたい」といった申し出を断ることもできるようになりました。今後のためになんですけど兵庫県チームは毎週当センターで現状をお伝えしてからのスタートだったので、次のチームが来る度に申し送りをしていたのですが、それを例えば岩手県だとセンターのホームページにそれを掲載していたんです「〇〇から△△は雪道」といったこととか色々な情報が載っているホームページでした。そういうものを作って随時更新して「それを見て下さい」みたいにするのも1つのやり方かなとは思っています。

【福本】 仙台市一本ではなくですか？

【林】 センターとしてです。

【福本】 今のホームページを更新していくということですね。

【林】 「支援して下さい皆様へ」という感じでやるのも手かと思いますが。

【福本】 ガイドラインでは、「地域精神保健福祉活動に関する援助方針の検討」、「各区保健福祉班と連携」、「関係機関との連携」、「必要な体制整備の調整」、「地域での災害時相談支援活動

の実施」、「デイケア活動の順次再開とその周知」と書いてあります。区役所とのやり取りがこの時期は増え始めるんでしょうか？

【原田】区役所とは初めからやり取りしていました。最初に情報が集まって来る場所は区役所だと思いました。

【福本】わかりました。さっき原田先生がおっしゃった、情報が入ったからこそ R 地区に行けたけど、どこからも情報が来なければ全部の区に行くことになるとか、そういうことですね。とりあえずまずどの区にも行って見て情報を収集するということが必要なんですよ。

【佐々木】今回は、津波被害のあった若林区、宮城野区、仮設ができた太白区での情報収集はできたけど、青葉区や泉区での情報収集はできませんでした。

【小林】門田さんには、はあとぼーとまでの出勤ができない状況だったので泉区に出勤してもらっていましたが。

【門田】私は泉区役所にすごく温かく受け入れて頂きました。避難所に一緒に連れて行って頂いて避難されている方のお話をうかがったりしていました。区役所は一丸となって「皆でがんばろう」という雰囲気がありました。

【小林】「応急救護期」では、たぶん本庁からの連絡と原田先生が見にいていたことで一番被害が大きい所が宮城野区、若林区、太白区だとわかっていたことと、泉区はとりあえず何とか大丈夫そうだということで、方針として宮城野区と若林区を中心にチームを出すのと決めたのだと思います。でも、青葉区は情報がなかったかもしれません。

【林】私は青葉区の障害高齢課長から話は聞いていました。認知症の方の問題とか、帰れるのに帰れない方の問題とか、福島など他県から入ってきている方がいるといった話は聞いていましたが、結局、宮城野区、若林区に比べれば被害の大きさが雲泥の差だったので、まずはそちらにどうぞという話をされていたのです。

【小林】初動はそれでよかったと思いますが、もう少し経ってからだと、各区で色々な問題が出てきていたので、連絡会議といったものは必要だったのかもしれないと思います。

【福本】ガイドラインには一応書いてありますね。

【小林】でも区役所に行って色々な依頼をされたり、現場で情報を得たり電話で所内にいる人に情報が入ったり、情報が錯綜していて、その辺の連絡調整がどうだったかとは思いますが。

【福本】窓口が明確になっていると情報も集まりやすいけれど、個人的に知っている人が知っている人に連絡しているからですよ。

【小林】でも区役所にしてみたら色々頼みたいことがあると思いますし、でもセンターでは皆外に出ちゃっているので、そこを集約して一元化するのが大変だったと思います。

【林】あの頃は職員が宮城野区に行っている時に津波警報が出たり、余震も多かったり、自分たちの安全も確保しながら動かなきゃならないこともありました。携帯も買ったんでしたね。3 台買うまでは結構個人の携帯でのやり取りで、電話が通じにくいからメールを使ったりしていました。連絡会議が開ければ良かったかなとも思いながら、一方ではだんだん各区役所ではいっぱい、いっぱいになってきていて、「他の区はどうだ」ということが禁句になりつつあった時期でもあったかなと思います。

【福本】例えば、連絡会議はそこにそれぞれの主な人が集まってくるというイメージを持ちますけど、おそらく本庁だと課長会などは3月の内に頻繁に開かれていました。そういう場を使えるといいでしょうか。

【林】そうですね。

【福本】本庁は機能が保たれているから皆さん情報は取りに来るし、言いにも来ます。そういう場面は活用出来た方がいいかもしれないですね。

【林】局長会で出たことを局内に降ろすっていう流れがあったと思うのですが、その情報が公所でも得られるとより良いかと思います。センターではそれをあまり把握していなくて、ちょこちょこ情報のおこぼれをもらいながら動くみたいな感じでしたから、それがもう少しきちんとわかっているとより動きやすかったかとは思いますが。ですから、課長会議もそうですし、本庁とも密に連絡を取りながらやった方がいいんだと思います。

【福本】本庁にはあとぼーと仙台担当みたいな人がいてもらうといいんですよ。いないんでしょうね。

【林】他のことも色々ありましたから、そんなに公所のことには構っていらなかったと思います。

【福本】次の「5月～7月」で座談会は終わりになります。「安定模索期」という名前で、「新年度・新体制の開始」、「避難所が閉鎖」「兵庫県チームが撤退」といった出来事がありました。この時期に行う事としましては、「平時の活動との統合を行う」です。後は「関係機関との連携」という面での「連絡会議の開催」、「外部応援チームの派遣要請の終了」となっています。まだ平常時ではなかったと思いますが。

【林】ガイドライン自体が3ヶ月までという作り方なので、そこ問題がありますね。

【福本】まだ1ヶ月目までの延長線上にいるような感じでしょうか。

【林】4月に避難所の大規模な統合があったんですよ。学校が始まる前に大きな統合があつて、5月にあすと長町に作られた応急仮設住宅の申し込みが始まりました。7月の避難所閉鎖に向けて6月中に色々動きがあつて、その時期には、仮設に入ってから支援の必要な方との関係が取れない事態にならないようにと、だいぶ苦労していたように記憶しています。

【佐々木】避難所で支援していた方が仮設に移った後も引き続きフォローアップしていけるようにと考えて、仮設住宅を取り仕切っている所から情報をもらったりもしましたが、厳密には出来なかったんですよ、現実的には。だから、プレハブ仮設で区役所の人たちが回っている中から気になる人たちをピックアップしてもらうというやり方になりました。

【林】そうせざるを得なかったですよ。

【原田】仮設に行って思ったんですが、「避難所から仮設」ではない方々もいるんですよ。避難所に入ってないけど仮設住宅に入居する方々もたくさんいました。だから、実際は仮設住宅で出会った方々の方がいっぱいいるんですよ。

【福本】それも今回経験したから分かったことですよ。

【原田】(仮設住宅に入居するまで)避難所ではなく親戚の家にしたとか。

【福本】一般的には、避難所にいる方が全員仮設に移るというイメージでしたが。いかがでしょうか、他のことで何か思い出すことなどありますか。

【佐々木】避難所の最後の方は、日中は人がいなくなっていましたね。

【森谷】そうですね。あと相談室を設けてそこに相談に来て頂くというスタイルを作ったんですが、そこに来る方はまず少ないという状況でしたね。

【佐々木】「こころの相談室」と言ってもそうそう来られないものだという反省ですね。

【森谷】家の片付けに行くなどで、日中は避難所にいない方が多い状況が結構ありました。最後の方はガラガラでしたものね。

【林】そういう現状の一方で、あの頃は「PTSD(心的外傷後ストレス障害)の人たちがこれからたくさん出てくるんじゃないか」ということに、こちらは恐れにも近いものを持っていたと思います。そこのバランスでどう動いたらいいのか、皆かなり迷いましたよね。「今後どうするか」という方針をギリギリまで出せなかったんですよ。

【佐々木】5月末の段階で、こういう相談者のいない状況の中で「応援として行くのはどうなんだろうか」と、兵庫県の県庁の方々がいらしたことがありました。結果、6月までは派遣するという話を内輪でしましたよね。

【林】そうでした。6月の後半はもう来る日数を減らして頂いたんですよ。結局、遠くから時間とお金と手間をかけておいで下さることと、こちらが自分たちで全部やれるかということと、一方で相談者は少ないということと、それらの間でどうするかということでしたよね。また、研修をして欲しいという申し込みも5月の下旬頃からあつて、それに対して兵庫県チームの方に講師を務めて頂いていたんですけど、それも「あなた方も出来るように」と言われていました。実際、どのようにこれからやっていくのかということが問われた時期だったと思います。

【福本】そういう時って、「そうだよな」って思ったんですか？

【佐々木】ホッとしましたよ。

【福本】ホッとしました？

【佐々木】だって、遠くから来て頂いているにもかかわらず相談する方がいなかったんですもの。

【小林】6月、7月が私はキツかったです。行っても相談がないのに行かなきゃいけないのかなっていうことと、今思えば、ガイドラインの中では保健福祉活動だけになる時期になっていたのに私の中では「応急」の感覚でいて、でも気づいたら周囲は通常になっていました。仮設入居の時期で、避難所に行っても人はいませんでしたし、センターとして何をやっていくのかということが全体的に漠然としていて、そういう意味で大変な時期だったと思います。

【福本】区役所も5月に人事異動*がありましたからなんとなく一旦動きが止まっているような感じがしましたね。そろそろ時間になります、何か話したいことがある方いますか？(佐藤)大介さんはどうですか？ちょうど異動してきた時ですよ(※平成24年度の仙台市の人事異動は、通常の4月ではなく5月に行われた)。

【佐藤大】行って避難所が残った状態で、あすと長町あたりは6月頃には入居者を決定してと、ちょうど被っていく時期だったんじゃないかと思います。避難所に残っている、昼間行って会える、あえて残っている方というのは、いわゆる元から何か事情がある方々だったと思いますけど。これを境にしてやっている事が明らかに質的に変容したのは間違いありません。この、最初の薬がないとかそういう地域のいわゆる精神科医療がメインで過ぎていった時期から、医療機関がしっかり動くようになって病院に行く人は「行って下さい」と勧めて、避難所で何をするかというと、人が沢山残っていれば声をかけまくっていれば時間は過ぎていきました。ただ、やっていたことはよく分からないって事ですよ。個人をほぼ特定されない、生活がよく分からない避難所の中にいるという一点を切り取ってやるってような感じなので、自分たちは毎日出かけていって仕事している感じはあるけど、受ける側にしてみたら、しっかり食い込んでいく継続性のある援助としては受け取られなかったんだろうなと僕は思っているんですよ。だから、いくら仮設に入る予定の人のリストをもらってきても、避難所にいる人の名前とか住所とか、そういう事と結びつける情報を持っていないんですよ。あってもわからないですよ。一切わからない。そういう感じはあったと思いますね。そういうことも仕事だと思うから不全感を感じてやった事は一度もないんですが、ただ、この先「自分達が撤退してしまうんじゃないかな」と思ったことはあります。6月、7月頃の所内での話の出方とか見ていて、「このままやっばりうちは終わるんだ」と思った時はありました。8月以降、仮設が出来上がって、そこへ自分たちが今までと違った形で入るとなったことについては奇跡に近いと思っています。そこは良かったと思っています。

【福本】それは、じっくり関わることになったからということですか？応急的な時は対症療法的な関わりしかできなくて、ちょっと残念ですよ。「この人、気になる」って思っても、その時求められていることってせいぜいその場限りですから。ですが「現場と一緒にじっくり関わられるようになったっていうことが良かったと思っている」ということですか？

【佐藤大】さっきPTSDの話が出ましたが、そういう、症状というところでの切り取りでないスタンスに変わったはずなんですよ。その立ち方の軸足の置き方がやっぱり変わった、変える側に立っていることは良かったと非常に思っています。この時に上手く軸足を移せたから、今もとりあえずやっている、人を出していられると思っていますね。活動の量的なものに関しては下がった時期なんですけど、非常に意味のある時期だったという風に思っています。

【福本】そういう意味では、ガイドラインにそれは書かれてないですからね。「通常の業務になる」ということしか書いてないので、これと違う点はそれかもしれないですね。それでは、時間となりましたので、これで座談会を終了したいと思います。本日お話しして頂いたことを、当センター作成の「仙台市における震災後のこころのケア活動のまとめ」にも反映し、活動の総括を行っていきたいと思います。

〔収録：2013年2月7日〕